

脳を鍛えよう、 しなやかな筋肉のように

総務理事 萩本和男



ちまたでは、脳のトレーニングなど潜在的な能力の開発・維持に情報通信機器の活用が話題になっている。イチロー選手や松坂投手のようにプロの世界では、結果がすべてであり、しかも、それはだれにでも分かりやすい。ホームであれアウェーであれ、結果の善しあしで、大きなお金が動くことになるプロの世界である。囲碁や将棋の世界はもとより、スポーツの世界でも情報通信の活用が勝敗の分かれ目に大きな役割をもたらしている。

本学会が対象としている情報・通信の分野でも専門職としてのプロの世界が膨らんできているように思う。ソフトウェアはもちろんハードウェアでもシリコンがもたらす高い製造性は、グローバルマーケットの成長と連動して、一人勝ちの世界を創出している。標準を取り、グローバルマーケットを支配すれば、圧倒的なコスト削減を可能にし、揺るぎない地位を得ることができる。ローカルの勝負が成り立たなくなり、より大きな規模での勝負が必要になってきている。

成功例を後から、理由付けすることは可能であるが、まだまだ全くの未知数の初期段階でも強い取組みができるのはどこから来るのだろうか？「急がば回れ」というように、大きな目標と着実な進歩を積み重ねていくことが決して容易ではない。まだまだ結果が出ていない段階で、目標に向かって没頭することは、信念といえればそれまでだが、どのように若い時期から、既成観念にとらわれずに強い信念が形成できるのだろうか？ある部分直感だったり、過去の経験から刺激されたりすると思うが、単にびんと来たというのではなく、居ても立ってもいられず行動に移る力が、まさに脳の力だと思う。大きな果実を得るには、「ここ」というときの瞬発力が欲しい。そういう力を養うには、常日ごろから脳を鍛錬することが重要である。

学会は、そのような鍛錬の場として、もってこいである。本学会では、会誌や論文誌を発行しているが、大会や研究会は、双方向のコミュニケーションが可能で、より刺激的である。特に、新しい研究分野を立ち上げていくには、様々な視点で議論を行うことが不可避であり、研究会での仲間作りと議論が役に立つ。スポーツの世界になぞらえれば、国内大会から世界大会へステップアップするのは自然であり、国際的な場での発表・議論、国際標準へのステップを登ることが目標になってくる。このような場合にも、国内の論議を固めながら、世界的な論議を行うことが必須である。本当に大事なことは、技術や理論などはもちろんであるが、どういう信念でそれぞれの研究成果を生み出してきたのか、アイデアと実行の源泉に触れること、言い換えれば、感性に触れることが重要で、それは議論を通して、「前人未踏の領域に最初に到達したい」という欲望に基づき、アドリブとぎりぎりの勝負を行うことで初めて可能になるように思う。教えてもらうものとは少し違うのである。

オリンピックなどを見ていると気が付くと思うが、プレーヤだけの戦いではなく、ルールや会場などの外部条件の戦いも、勝敗に重要な影響を与える。国際会議での発表にも、プログラム委員会での査読から会議のトピックス設定などの運営する側に立ってみると、論文のまとめ方の視点が高まる。良いコーチが優れたプレーヤを生むことが多い。トップアスリートの筋肉は、「アクションを取るまでは驚くほど柔らかく、瞬間的に固く強い筋肉に変る」といわれている。研究者の脳も、かくありたいもの。さあ、内外の学会にはいろいろな人がいます。これらの活動を活用して、脳を柔らかくして、びっくりするようなアイデアを出したいですね。